大分県立看護科学大学の理事長・学長になって思うこと

進化する看護の大学、大きく変化する社会と高校生の進路選択への視点

村嶋 幸代（高22回・東京大学名誉教授）

福高卒業後、福岡を離れて丸40年。昨年、九州に戻りました。といっても、福岡ではなく、公立大学法人大分県立看護科学大学の理事長・学長として、大分市に住むことになりました。県は違っても同じ九州ですから、温かい人々と美味しいお魚に癒されて、楽しく勤めています。

私が大学受験を考えた40年前に比べ、看護の大学は格段に進化しています。当時、看護学が学べる大学は全国で3つしかなく、私が選んだ東大はその一つでした。現在は210校になっています。大学院も、修士課程が144校、博士課程が56校になります。福岡県には計11校の大学があります。40年前には零だったことを考えれば、隔世の感があります。

医療を取り巻く環境も変化し、それに応じて大学院教育も充実してきました。特に、修士課程で、研究能力を基盤にした高度の実践者を教育するプログラムが充実してきました。

例えば、大分県立看護科学大学では、平成20年度から、全国で初めてナースプラクティショナー（診療看護師、NP）の教育を始めました。既に、修了生が17名、県内外の医療機関や高齢者施設で働いています。

この試みは、目下、「特定の医療行為のできる看護師の研修制度を創設する」という形で、法制度化が検討されています。現在の日本では、医療処置を必要としながらも、自宅や高齢者施設など日常的に医師がいない場所に住む療養者が沢山います。こういう療養者が、新たな制度創設によって、特別に訓練された看護師からタイムリーに医療処置を受けることができるようになります。

今までは、短時間の処置のために頻回に通院したり、医師の手が空くまで長時間待ったりしなければなりませんでしたが、そういう問題点が解決され、療養する者にとっては福音になります。

役割の拡大が検討されているのは、看護師だけではありません。薬剤師や歯科衛生士など、多様な職種が一歩前に出て、療養者のためにできることを増やそうと検討されています。今後、療養者を取り巻く医療チームの連携が格段に進み、療養者が安心して暮らせるようになることを願っています。

医療の高度化と高齢化が進む我が国では、様々なアイデアを出して乗り切っていかなければなりません。看護の大学が増加していること、大学院化が進んでいることは、その解決策の一つです。実は、世界的にも看護師教育の大学化は進んでいます。

高校生が進路選択をする時に、「彼らが活躍する30年後には、世の中は劇的に変わっている可能性がある」ことを念頭に置きながら進路を選択するように、ぜひ、お勧めいただければと思います。

【事務局報告】

黒永 哲至（高26回）

事務局の主な業務は、総会運営と各回常任幹事との連絡及び年3回の常任幹事会の設営です。平成25年の総会は4月20日に開催され、皆様のご協力で無事終了することができました。

また、同年の常任幹事会は、第1回を6月20日に常任幹事と役員計55名の参加で開催し、総会の予算・決算の審議及び反省等を行いました。第2回は9月18日に58名の参加で開催。次ページで紹介の26年総会・懇親会の企画及び予算を審議し承認されました。2月の常任幹事会では、25年度の決算・新年度予算の審議等を行いました。詳細は4月の総会で報告します。

3000名以上の同窓会を円滑に運営するには、各回の学年幹事（常任幹事）が一番重要な役割をもっています。現在61名の常任幹事が事務局に連絡先の届出がされています。転勤等で変更がありましたら、速やかに事務局までご連絡ください。

悠久の時を生きる人々と建築

～校舎文化財指定に寄せ・創立100周年に向けて～

古泉 奈々（高59回）

2012年3月26日、福岡高校の正門や正面玄関、地下通路を含む地上三階地下一階建ての校舎が、1927年の竣工から85年を経て、県の有形文化財に指定された。

本校舎の設計は三條栄三郎、洋風建築への建て替えが進んだ大正から昭和初期にかけ、活躍した建築家である。三條の作品には、アール・ヌーヴォーやセセッション（前者と同じく19世紀末からドイツ、オーストリアで起きた新しい造形表現運動）の影響の濃い、旧福岡県公会堂貴賓館（国重要文化財）、旧福岡県庁舎などがあり、福高校舎もその流れを汲んでいる。壁面に織り成される直線と幾何学模様の精巧なつくりは今なお美しく、その保存は文化財指定の目的のひとつとなった。繰り返された増改築の跡は、この校舎が長い時を生き続けたことを示す証拠だ。機能や構造を当時のまま受け継ぎつつ、現在も教室などとして使われ続けていることも高く評価されている。

私論だが、建築は時間と共に在ってこそ意味がある。私は建築へ携わる身であり、その道を志そうとしたきっかけに、100年以上に渡り人々に愛され、今も建造され続けているガウディのサグラダ・ファミリア（福高パティオの設計監修の外尾悦郎氏＝高25回も主任彫刻家として工事に参加している）の存在があった。一方、足元を見ると、日本の建築寿命は、残念ながら諸外国よりもずっと短いのが現状だ。自分の仕事では主に住宅分野を扱うが、日本の住宅がより良く、長く快適に使えるものなるための手助けをしていくことが今の私の目標である。

本稿を書くにあたっては、創立100周年に向かう福中福高の資料・文献を繙くことで、校舎に関することのみならず、諸先輩方の多岐に渡る功績の重厚な積み重ねを知ることができた。人も建築も、同じ悠久の時を生きている。脈々と受け継がれていくものが、こうして歴史を作っていくのだろう。